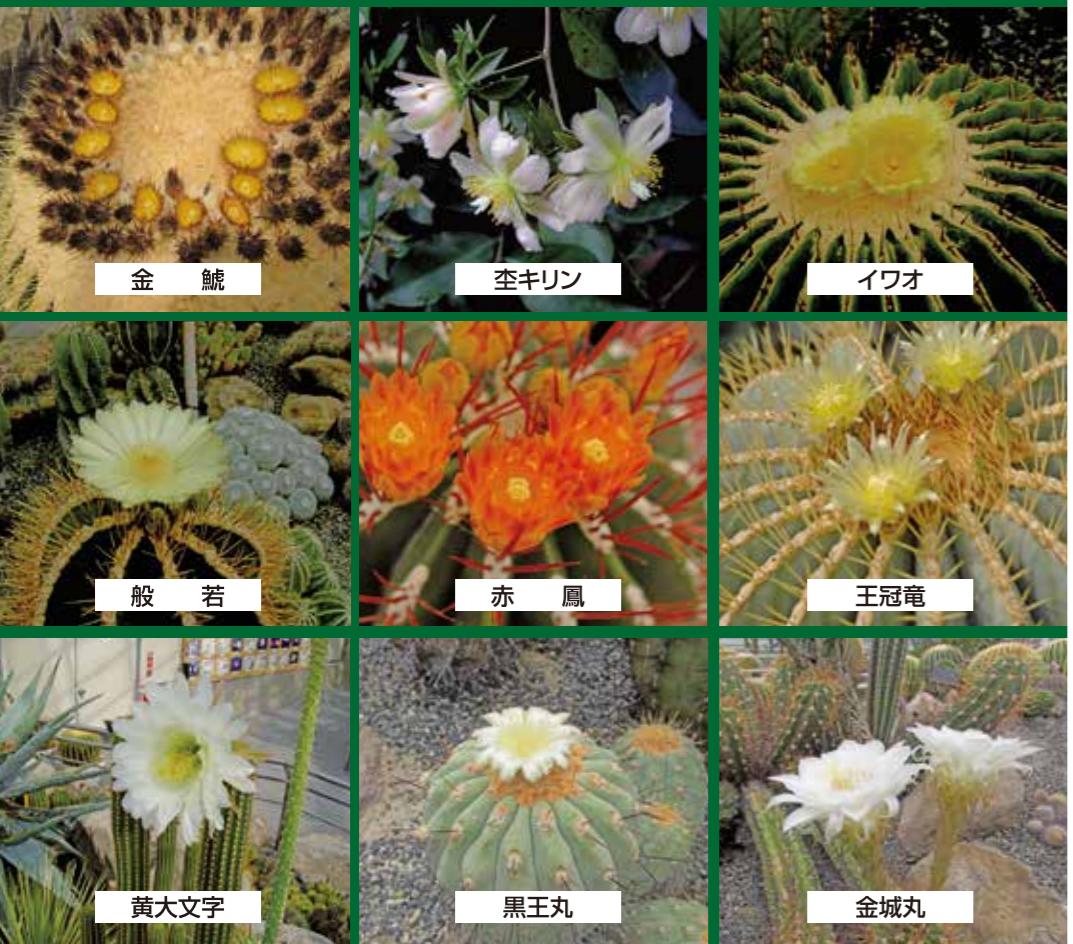




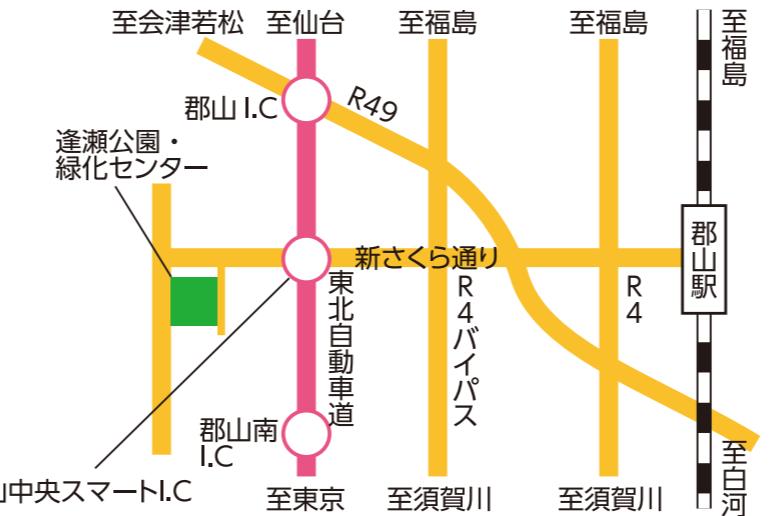
逢瀬公園・緑化センター サボテン園

逢瀬公園・緑化センターのサボテン園は、サボテンの収集家としても知られた太田辰雄氏（太田総合病院元理事長）が、半世紀余に渡って収集・栽培した約800株のサボテンや多肉植物を、辰雄氏の没後、妻の緑子氏が福島県に寄贈されたことを受けてつくられた施設です。



サボテン園のある県営逢瀬公園・緑化センターは、郡山市の郊外に位置し、郡山駅から西に約11kmの距離にあります。面積32.5haの園内には、中央広場、さくらの広場、わんぱく広場、日本庭園、薬草園、ロックガーデンなどが整備されています。

交通のご案内



- 郡山駅前8番ポールから、市役所・新さくら通り経由河内行きに乗車し、緑化センターで下車。（約35分）本数が少ないため、運行時間の確認が必要です。
- 東北自動車道郡山I.C.から車で約20分、郡山南I.C.から約25分。
- 郡山中央スマートI.C.から車で約10分。

利用に際してのご案内

●公園内の利用

- ・休園日／年末年始(12月28日～1月3日)
- ・入園料、駐車料／無料
- ・園内への車両乗り入れは、身体のご不自由な方、教室等への参加者に限ります。

●駐車場の利用

- ・利用時間／7:00～18:00
- ・駐車台数／西口駐車場140台、東口駐車場40台

●休憩所「木かけ」、サボテン園、薬用植物園温室の利用

- ・利用時間／9:00～16:30
- ※薬用植物園温室は、12月から翌年3月まで冬季養生のため見学できません。

●公園事務所 研修室(第一、第二)、会議室の利用

- ・利用時間／9:00～17:00
- ・利用料金／半日660円、一日1,320円
- ・収容人員／20名程度（第一、第二研修室を合わせ最大50名程度の利用可能）
- ・プロジェクター、スクリーンの機材貸出可。

●注意事項

- ・植物を傷つけたり、採取したり、動物をつかまえないでください。
- ・花火、たき火、その他火気の使用は禁止です。
- ・他の公園利用者の迷惑となる行為はご遠慮ください。
- ・ペットをお持ちの際は必ずリード等で繋いでいただき、扇はお持ち帰りください。
- ・園内にはゴミ箱を置いていませんので、ゴミはお持ち帰りください。
- ・集会やイベント、展示会、販売、募金、営業目的の撮影等を行う際には事前の許可手続きが必要です。

設置者：福島県

指定管理者：(公財)福島県都市公園・緑化協会

公園所在地：郡山市逢瀬町河内字東長倉1-3 逢瀬公園・緑化センター事務所
Tel.024-957-2221 Fax.024-957-2219

発行：(公財)福島県都市公園・緑化協会

サボテンと多肉植物

多肉植物とは、本体や葉、地下茎などが肥大して貯水機能が発達した植物の総称です。

サボテンもその特徴から多肉植物に属しますが、サボテン科だけでも3000種に達する大グループのため独立して扱うようになりました。

サボテンの語源は、南蛮人がウチワサボテンの樹液をシャボン(石鹼)として使っていたことから、石鹼のようなものという意味で石鹼体(さぼんてい)と呼んだのが始まりと言われています。



サボテン園 よもやま話

サボテンや多肉植物は、知れば知るほど不思議な植物です。ここでは、本園で見られるサボテン・多肉植物に関する様々な話題を紹介します。情報の多くは、開園以来、サボテン管理の指導や助言をいただいている「渡辺清治さん」から聞いたお話しです。

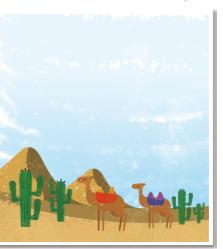


サボテンに「トゲが生えている」理由

サボテンの最大の特徴として挙げられるのはトゲトゲした見た目です。一つ目は、トゲが生えている事によって他の「動物から食べられないようにする効果」があります。サボテンは元々葉っぱのある植物でしたが、天敵から身を守るために葉が変形して現在のようなトゲになつたとされています。

二つ目は、トゲには砂漠での「強烈な日差しを和らげる効果」があります。サボテンはトゲがあるおかげで表面の温度を下げていますが、トゲを全て抜くと体表面の温度が10度も上がってしまいます。

三つ目は、植物が、生きていいくに必要な「水分をトゲから補給」しています。雨が少ししか降らない砂漠では根から水分を吸収するのは難しいため、「トゲを使って空気中の水分を取り込んで」いるのです。



サボテンは砂漠で水分が少ない過酷な環境でも枯れずに生きているのは「サボテンの身体に特徴」があるからです。普通の植物は根から水分を常に吸い取っていますが、サボテンは雨の少ない砂漠で根っこから水分を吸い続いているのが難しい環境に生息しています。

そのため、サボテンには「茎の中で長期間水分を貯め込む機能」を備えています。たまにしか降らない雨を十分に吸い取って、「しばらくの間は茎に溜めこんだ水分で生きていく」訳です。サボテンを切ると沢山の水分が出てきます。

キンシャチ 金鯱に最適な温室



この温室では金鯱がたくさん見られます。この多くは太田辰雄氏が戦時中、軍医として出征する前に種子をまいて育てたものと言われています。どれも同じように見えますが、よく見ると様々な品種があります。棘に特徴がある狂棘金鯱や白棘金鯱、棘のない無棘金鯱、斑入りの金鯱など。どれも貴重なサボテンです。

希少な斑入り金鯱

イルカ 海を跳ねる入鹿



この柱サボテンは、地面に寝そべるように生育します。生長し伸びると先折れし、また伸びると折れて発根します。自生地では、這いまわる悪魔と呼ばれ、日本では蘇我入鹿の首が切られた後も這いまわった伝説から名が付いたと言われています。また、海面を跳ねるイルカを連想させることに由来するとも言われわれます。

這うように生長する入鹿

幻の花 青の竜舌蘭



この花は開花するまで50年から80年かかることから、センチュリー・プランツとも言われます。この仲間に葉を取除き株の中身をえぐって壺状にすることで、糖分を含んだ液体が溜まるものがあります。メキシコの原住民は、これを皮袋に入れて軒先に吊し、発酵させてテキーラを作ったそうです。

大きく育った青の竜舌蘭

キンシャチ 天皇家に献上された金鯱

北棟には天皇家に献上された大きな金鯱があります。由来には二説あり、昭和天皇が皇太子に即位された立太子の礼（大正5年）でメキシコ在留邦人が献上した説。二つ目は昭和5年にメキシコ政府が献上した説。何にしても、現在残っているのは京都府立植物園にあるだけで、貴重なサボテンです。



150年以上と見られる金鯱

ミドリハニヤ 妻の名を冠した緑般若

太田辰雄氏が、妻の緑子氏の名を冠したのが緑般若です。般若特有の白点がないのが特徴です。裸般若や青般若とも呼ばれます。以前、この温室には日本で初めてサボテンを輸入した時の一つがありました。残念ながら枯れてしまい、今ある緑般若はその子どもにあたるものです。



モク サボテンへ進化？ 垂キリン

垂キリンの仲間は、一見するとサボテンには見えません。樹木からサボテンに進化する途中にある植物と言われ、様々なサボテンを接ぐ際の台木としても重宝されています。比較的温度の変化に敏感なことから、この温室では、垂キリンの葉が落葉すると加温する目安としています。

温度に敏感な垂キリン

サボテン園へようこそ!!

北棟には金鱗などの玉サボテン、南棟には柱サボテンや多肉植物を主に展示しています。貴重なサボテンが数多く見られますので、どうぞごゆっくりご覧ください。



南棟内部



北棟内部

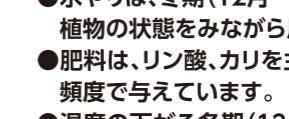
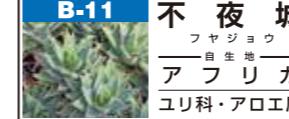
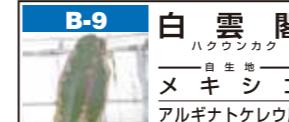
南棟 A ブロック

主なサボテン・多肉植物配置図



南棟 B ブロック

主なサボテン・多肉植物配置図



サボテン園の管理

本館では、適切な維持を図るたの管理を心掛けています。

- 水やりは、冬期(12月～3月)と盛夏期(7月中旬～9月初旬)は原則行わず、それ以外の季節に植物の状態をみながら月2～4回程度しっかりと与えます。
- 肥料は、リン酸、カリを主体として、窒素を総量の3割ほど混ぜた化成肥料を3年に1回程度の頻度で与えています。
- 温度の下がる冬期(12月～3月)は、室温が5°Cを下回らないよう2台のボイラーを自動運転させ温風を温室内に送っています。